

2015年ITDNインプラントセミナー 「インプランタイトィス vs 歯周病の発現機序」

石島 学 Ishijima Manabu
UCLA Weintraub Center

昨年の暮れ12月27日(日)、東京国際フォーラムにて石原和幸教授(東歯大・微生物講座)、有賀正治先生(長野県開業)を迎え、標記オープンセミナーが開催された。

石原教授からは、歯周病とインプランタイトィスの成り立ちや最新の研究手法について、細菌学的な観点から解説をいただいた。たくさんあったトピックのなかでも特に興味深かったのが「16S rRNA メタゲノム解析」の話だ。この解析法は、原核生物のリボソームRNAの一部である16S rRNAはすべての菌が有する配列であり、なおかつ多様性があることを基本原理としている。つまり、この16S rRNAを読むことで菌種が特定できるということだ。メタゲノム解析では、シーケンサーを用いてプラーク中に含まれる細菌の16S rRNA 配列を網羅的に解析する。

古典的な培養に頼る研究手法は、嫌気性の菌の培養が難しいことや、同じ菌種でも株による結果のばらつきが大きいこと、菌種が多すぎて網羅的な解析が困難なことなどの課題も多かったという。16S rRNA メタゲノム解析は、これらの問題を克服できる新しい研究手法として、現在期待されているそう

だ。この解析法を用いることで、Fili-factor alocis, Phylum synergistetes, TM7 といった菌が、新しい歯周病に関連する口腔内細菌として報告されているという話からは、歯周病研究の進歩を感じた。今後、この解析による発見が新しい治療法の開発に繋がることを期待したい。

有賀先生からは「超高齢化社会における取り組み」というタイトルで、ご講演いただいた。先生のクリニックが掲げる「患者様に生涯にわたり笑顔で健康に過ごしてもらいたい」という理念を実現するために、若年者から高齢者に至るまでの間、各ライフステージでどのような医療を提供しているかをお話していただいた。

有賀先生によると、若年者には十分な予防管理を行い、壮年期から高齢になるにつれて欠損などの問題が生じた場合、専門的な知識と技術をもって質

の高い治療を提供することが生涯にわたり良好な口腔環境を維持するために重要だということだ。まさに理想的なコンセプトであると感じた。今後、この考えに基づいて医療を受けた同一の患者さんにおける長期的な症例を、是非とも見せていただきたい。

主催、代表の加藤英治先生からは、インプランタイトィスを予防するために重要な粘膜貫通部でのディフェンスについて、論文で示されるエビデンスと先生の実際の症例を用いて解説していただいた。そして加藤先生の進行で行われた最終ディスカッションでは、感染、そして「生命とはなにか?」というテーマについてまで、議論が交わされた。

臨床のみならず基礎の話題、さらには生命の神秘に至るまで真理を追求しようとする本会は、まさに歯科医学の年末総合格闘技であった!!

